

藤堂高虎直筆友重名でもりおりべに宛てた
充行状中「なんむん」のべールを脱ぐ

野々下 晃

(会員 佐伯市西上浦)

以上

今度かうらい なんむんにて 一番のり 一番くひ
取候義 てからひるなく候 ①がぬけている はうミとして ちけう

式百石遣候 弥ちうせつ かん用 者也

民部大夫

九月廿七日 友重 在判

もりおりべ殿

この充行状の冒頭へ行(くだり)「今度かうらいなんむんにて」を直訳すると、「今度 高麗 南門にて」となる。訳文のとおりに解すると、高麗は朝鮮全域を指し南門は一つの城の一つの門名を指す。

史実に照らすと、この充行状が指している戦場「南原の城」は朝鮮全羅北道に位置し、その規模は方二十五丁に及び東西南北の四門を備えていた。

と解すると、本状の文脈から考えて、朝鮮全域を現わ

す「高麗」の次に、直ちに一城の一門を現わす「南門」という字句が配せられるであろうか。

この点については、本状研究当初からその文脈の整合性について抱いていた矛盾感であった。よって本稿に於いては、これまで収集した多くの関連資料を基に、高虎が「なんむん」という四文字を以って表現した裏の史実を探求し、それが意味する真相に迫ってみたいと思う。

◎資料(一) 『佐伯市史』一九七ページ南原城の戦

「南原の城の戦は慶長二年八月のことであったこの城には明将楊元が韓将李福男李春元らと共に籠り堅城の聞えがあつた。日本軍は二道から進みこれを包囲した日本軍は南原に着くと宇喜多秀家太田一吉藤堂高虎らは南門に向ひ加藤嘉明外二将は北門に蜂須加家政 毛利高政ら九将は東門に向ひ小西行長等三将は西門に向つた」

とあつて、藤堂高虎は南門に向かつているが、毛利高政(友重)は東門に向かつている。

◎資料(二) 毛利高棟文書(一九七ページ)

毛利高政南原城討捕領注文(冊子)

〔表紙ウハ書〕

一南^{〇〇}むん^{〇〇}の城^{〇〇}におゐて討捕くびの注文

上の欄外に「南^{〇〇}むん^{〇〇}城^{〇〇}」における討捕頭を注す。

この文中の「南原城」「南むんの城」「南むん城」の字句が「南門」を表現していると察するには無理があるのではないか。いずれにも「城」という字がついている。

◎資料(三) 秋山文書(添付資料)

秀吉公朝鮮征伐之時

高政公御旗木ニテ討捕首帳

森織部手扣

南^{〇〇}うん^{〇〇}の城^{〇〇}におゐて

討捕くびの注文

毛利民部大輔

この冊子の表紙は、森織部の直筆とも察せられるが、標記のとおり「御旗本」を「御旗木」と書いてあり、討捕くびの注文冊子の表紙には右筆の書と察せられる文字で「南^{〇〇}うん^{〇〇}城^{〇〇}におゐて」とある。「南原」の現地音は「南ウオン」であるから、この表現は「南門」よりむしろ「南原」に近いのではないか。従って、この資料中にも「南門」を表現する字句は見当らない。

◎資料(四) 毛利高棟文書(一三四ページ)欄外

「南原の一番のりを賞し二百石を与う」

とあって、この資料にも「南門」を現わしている字句は見当らない。

◎資料(五) 森織部行重供養塔碑文

宝暦十年戸倉家八代庸貞の依頼によって、当時の養賢寺住職朱月山老師が誌した森織部供養塔碑文にも

「再陪」 船入朝鮮門南原城

とあって、南門を意識した字句は見られない。

◎資料(六) 『津市史』(七八ページ)

津市五日会会長(土族会)七里亀之助氏提供

三南水軍全滅を機会として全羅南道(全羅北道が正しい)南原城に向ひ高虎水軍は豆知津から上陸してこれに加り八月十二日全羅の重鎮である南原城を包圍し十五日夜の一斉攻撃に藤堂隊は南門の一角を破って先登し遂にこれを陥れた。その時取った首の数は二百六十九で大閤は感状を出してその戦功を賞した。

とある。この記録によると、南門の一番のりは藤堂隊であって高政隊ではない。

この点について、昨年(平成二年)末、この資料の提供

者である七里氏に宛て次のような趣旨の質問状を送った。

高虎と高政の間柄から推して一斉攻撃という乱戦となつた際両軍は合流して「なんむん―南門」で戦つたことも考えられるのではないか。こちらの資料(充行状)によると南原城「なんむん―南門」の一番のりは高政隊の森織部とありその時の討捕首数は合四十一という記録が残っている。

『津市史』にある津藩の南門に於ける討捕首数二百六十九の中には佐伯藩の四十一が含まれているのではないか。

と。

これに対し、七里氏から厳しく反撓した次のような返事を受け取った。

貴殿といろいろ論議しても不明でせう悪しからず

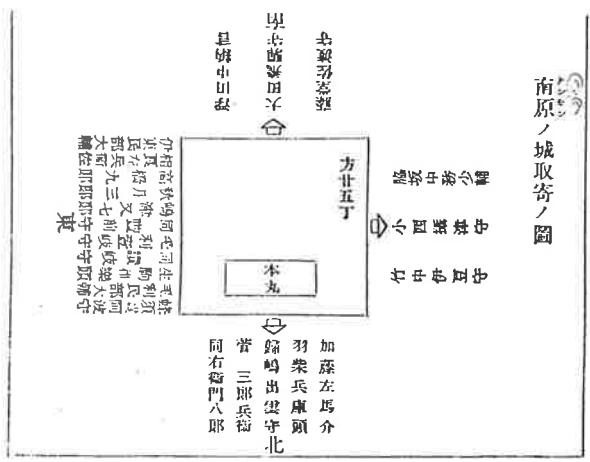
と。これまで略一ケ年余続いた同氏との交信もこれを最後に杜絶した。

顧みると、当時にあつては「なんむん―南門」に固執し過ぎた結果の誤りであることを自認せざるを得ない。

なお且つ『津市史』にかかる記録が残されている以上高

虎が件(くだん)の「充行状」を執筆した際「なんむん」を「南門」と意識したとは考えられないのではないかと。津市の七里氏もこの点を厳しく指摘し「状景から考えても云々」と反論されている。

◎資料(七) 「朝鮮記乾巻」第五百九十上



上図は本書二七八ページに載っている南原城攻略の際の諸將配置図である。◎印に注目すると「南門」と仮名が付されている。現地語(朝鮮)では南原は古田(ナムウオ)。

N A M W O N と発音し、南門は古岳ナムン N A M M U N と発音する。他国の人が聞くと、語感が極めて似ていて、誤植でないとする、前後合わせて七年に及ぶ布陣中に、日本将士の間で「南原（ナンウオン）が「南門」（ナムン）に訛り、高虎が南原を現わすのに現地音の訛りで「なんむん」という四文字を用いたと考えられないか。

◎資料(八) 『鶴藩略史』

七月(実は八月)公諸將と明將楊元を南原城に撃つ。城門を距たること七町公銃(焰魔王六尺六寸三分五量二十八匁五分)を擬し一人出ずれば一人を仆し再すれば則ち再びこれを仆す。一として虚丸なし楊元おそ耀れて出でず捍禦甚だ力む。わが軍おん暫せんを填め踏籍して登る公先んじて登り楊遁走し遂に之を陥る。

この資料にも友重(高政)隊が南門を攻めたという記録はない。方二十五丁に及ぶ南原城の門と門との間の城壁の外に掘り囲らした塹壕を填めてよじ登って先登したとある。

この記録を詳細に裏付けるのが次項に掲げる懲毖録である。

◎資料(九) 『懲毖録』柳成竜 朴鐘鳴 訳註

平凡社発行 東洋文庫357、懲毖録二四八ページ、五七「南原城が陥落する」からの抜粋
倭兵が南原城を陥れた。

この戦いで明国の將軍楊元は逃げ還り全羅兵使李福男南原府使任鉉助防將金敬老光陽監司李春元唐將接伴使鄭期遠らはみな戦死した軍器寺の破陣軍十二名も楊元に随って南原に入っていたがみな敵兵に殺されてしまった。ただ金孝義という者だけが脱出でき私に城の陥った事情を非常に詳しく伝えてくれた。

それによると楊元総兵は南原に到着するや城の壁を一丈ばかり増築し城外の羊馬牆に数多くの銃眼を穿ち城門に大砲三門ほどをすえつけ濠を一、二丈掘って深くした。

八月十三日倭の先鋒百余人が城下に入りこんで鳥銃を放ったがしばらくして止めみな田畝の間に散開してかくれ三々五々隊をなし行ったかと思うとまたやって来たりした。城の上にならわが軍が勝字(ヌンジャツ)小砲でこれに応戦したが倭の本陣は遠くにあり遊撃兵を出してきて交戦ししばらくに進み代

わる代わる出て来るので砲を發射しても命中しなかつた。それにたいし城を守るわが兵卒はしばしば賊の弾丸に當つて斃れた。

や、あつて賊が城下にやつて来て城の上の人に大声で呼びかけ、相談があると求めた。総兵が家丁一人に通訳をつけて倭營に行かせたところ倭の書を持ってもどつて来た。すなわち約戰書(果し状)であつた。

十四日 倭が城の三面をとり囲むように陣を構え、前日のように銃砲で代わる代わる攻撃して来た。これより前、城の南門の外に民家が密集していたのを賊が来るので楊総兵が焼き払わせていた。しかし石垣や土壁がまだ残っていたので来襲した賊は牆壁の間に身を隠して弾丸を放つたため、城の上の人にたくさん命中した。

十五日 倭兵が城外の雑草や水田中の稻を刈つて大きな束を作り、数かぎりなく牆壁の間に積んでいのが望見された。城中ではどういふ事態なのか推測出来なかつた。

夜一更(午後八時頃)倭の陣中で騒々しい音が大きい

に起るのが聞こえ、これにほぼ呼応して物を運んでいる様子があつた。そして一方では多の砲が城に向つて亂射され、飛んで来る弾丸が城の上に集中して霰あられが降る様であつた。城の上の人々は頸をすくめ取えて外を窺おうとしなかつた。一、二時経つて騒々しい音は止んだがその間に草の束がすでに濠ほらに積み重ねられて、ちよつとの間に城と同じ高さになつていた。倭兵たちは草の束をふみにじりながら城にはい登つて来た。すでに城中は大混乱し、金孝義は初め南門外の羊馬牆を守備していたのであるがあわて、城に入った。城の上はすでに人影がなく、たゞ城内のあちこちに火が起るのが見えるばかりであつた。走つて北門にいって見ると、明国軍がごとごとく騎馬して門を出ようとしていた。

しばらくして門が開き軍馬がわれ先に門を出た。倭兵は城外にあつて二重三重にとり囲み、それぞれ要路を守り長刀を奮つて、やたらと切りつけた。明国軍は首を垂れて刃を受けるのみであつた。たまたま月が明るく脱出できた者は何人もいなかった。楊

元総兵は、家丁数人と共に馬を馳せて突き進み、ど
うやら身ひとつで脱出した。ある者が倭は総兵であ
ることを知って故意に逃走させたのだと、言った。

金孝義は同伴の者一人と門を出たが、その一人は
賊と遭遇して死に、水田にとび込んで草の間に身を
伏せ、倭が兵を撤収するのを待って遁走したという
おもうに楊元は遼東の将なのでたゞ虜(女真族)を
防禦することは知っていたが、倭を防禦することは
知らず、敗北するに至ったのである。さらに平地の
城を守ることが甚だ困難であるということも知っ
た。

こゝに金孝義の言を詳細に記録し、後世城を守る
者に戒めとする所を知らせようと思つてこう云うの
である。

南原が陥るや全州以北は瓦解してしまい手をほど
こすすべもなかった。

のち楊元は、結局このことで罪を得、斬首してこ
れをさらされた。と。

この資料の中の◎印

その間に草の束が濠を平にし城と同じ高さになつて

いた、……倭兵たちは草の束をふみにじり城にはい
登つて来た。

という行(くだり)と、資料(八)『鶴藩略史』中の
わが軍塹を填め踏籍して登る云々

という行を重ね考えると、その位置は確認し得ないが
恐らく城の南門と東門の中間の牆壁南原城攻略に際し、
先登したのが森民部大輔隊であつたということに解され
るのではないか。

また、この資料○印の行

十五日倭兵が城外の雑草や田の中の稻を刈つて大き
な束を作り数かぎりなく牆壁の間に積んでいるのが
望見された城中ではどういふ事態なのか推測出来な
かつた。

という記録から推察すると、森民部大輔が採つたこの
作戦は、真に敵の意表を衝いたもので、南原城攻略戦に
対する友重の功績は、これまで喧伝されてきた「焰魔王」
のそれより、この作戦の優秀性に帰する所が大きいので
はないか。これを立証する資料が次に挙げる「戸倉家伝
記」中の一節と思ふ。

◎資料(十) 『戸倉家伝記』(秋山文書)

高政公再朝鮮表之御渡海の節も織部儀御供致し候朝鮮表にて南原之城攻之砌諸大将各御一戦を遊ばされ、八月十五日落城の刻高政公之御陣中に於て織部儀一番乗り一番首之高名を致し候。右一戦働之甲乙惣御大将秀家公より御吟味有之。惣手之一番乗り森民部大輔其の手に於て一番のり一番くび之高名森織部と軍帳に載せられ則秀吉公之御注進これあり候。

『戸倉家伝記』中のこの一節は、これまで掲げた資料(一)から同(九)までの内容を総括していると思うが、この文中にも「南原の城攻めの砌」とあって、「南門」という字句は見当らない。また、「右一戦の働甲乙惣御大将秀家公より御吟味これあり、惣手の一番のり森民部大輔其の手に於て一番乗り一番首之高名森織部と軍帳に載せられ云々」とあるが、「惣」は総に通ずる。故に本文を意訳すると、

総大将宇喜多秀家が、戦後南原城攻略戦に於ける各将領の戦功を論功行賞するに際し、総軍の中の一乗りを森民部大輔(友重)と裁定して秀吉に報告した。

と訳される。

この意に解すると、友重隊は南原城攻略戦に於て、単なる一門―南門という戦域の先登でなく、広く南原城全域の戦いに於ける先登と解され、その功績については格段の差がつくのではないか。従つて、高虎が件の充行状の執筆に当つて意識した戦域「なんむん」は、「南門」ではなく、「南原」と解するのが史実とも合致すると思う。

『懲咎録』によると、南原城の守備にはその総兵(総司令官)に明将楊元を充て、その補佐には全羅兵使で驍將の誉高い李福男等を配して、これを死守したとある。また、その陥落によつて全州(全羅北道)以北は、互解し收拾するすべもなくなつたとあり、なお総兵楊元はその敗戦の罪を得て斬首され、これをさらされたとある。

この記録は、南原城の陥落が、慶長の役全戦局を左右する重大性を帯びていたことを示唆するものと思われるが、その攻略に殊勲を樹てたもりおりべに對する充行状を執筆不能の友重が、高虎に依頼してまで配慮したという心情が察せられると共に、またその求めに對し進んで応じたという高虎の心境の程も領けるのではないか(『戸倉家伝記』より)。